

Title	馬場敬治著 技術と社会 (第一巻)
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.2 (1937. 2) ,p.329(171)- 336(178)
JaLC DOI	10.14991/001.19370201-0171
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19370201-0171

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

その自由主義における自由の發展形態が見出されることも、また偶然ではない。而してこれらの論者が社會主義の形態における自由を主張する點も注目し得る。同じイギリスにおいて、同じ傾向のファンクショナル、セオリーを持つ論者が、他面社會主義とは、反對の分産主義(Distributism)を主張することも、われわれは注意しなければならぬ。チェスタートン、ベロックなどの主張がこれである。彼等の主張も人間生活における自由の主張であつて、自由の否定者としてのコムミニズム(廣く國家集中主義の社會主義)と獨占資本主義の表現として、同じく自由の否定者であるファッシズムに反對してゐる。この傾向は、ジョン・ラスキン、ウィリアム・モリスの創造的人生觀の系統を引くものである。それは政治的勢力としては、いまだ強力のものではない。しかし、自由の新形態の主張者として、而して、擯取なき私有財産制度の主張者として、われわれの注目を要請するものである。かくの如く、自由が種々な角度において、論究せらるゝとき、近世史における最大な役割を演じた自由主義の研究は、一層深められなければならぬ。それは没落した一のイデオロギーとして放置されてはならぬのである。それは理論上からのみではなく、現實生活の上からも然りである。ラスキの著書の如きは、この點で第一に讀まらるべきものである。

馬場敬治著『技術と社會』(第一卷)

藤 林 敬 三

著者馬場教授が先きに(昭和八年)現代經濟學全集中の一巻として『技術と經濟』の一書を公にせられ、吾國に於ける技術の社會科學的研究に多大の刺戟を與へられたことは、讀者の周知する所であらう。然かも其の後數年にして今此處に私が著者の新著『技術と社會』(第一卷)を紹介し得ることは、單に私人の欣快とする所に止まらぬであらう。

既に著者の舊著と新著との表題がこれを示してゐるやうに、新著に對する著者の觀點は擴大せられて技術と社會の關聯に移されてゐる。兩著作の主内容に従つてこれを見れば、著者の舊著は技術の哲學的研究と——寧ろ——その經營學的研究であるのに比して、その新著は技術の經濟學的研究をも包接する寧ろその社會學的研究であると思ふ。そしてこの後の研究は既に著者に依つて先きの著作の内に公約せられた所である。(『技術と經濟』九九頁)

著者が新に問題とする技術と社會の關聯は、著者の見解に従へば、次ぎの如く二様であると考へられてゐる。即ち、

(A) 社會より技術へ及ぼす作用。

(B) 技術より社會へ及ぼす作用。

(A)の作用の結果は、(1)新しき技術的手段の追加(それは發明に依る)と、(2)既存の技術的手段の使用の程度に於ける増大と減少の二様の變化として現はれるのであるが、凡そかくの如き技術的變化を生ぜしめる社會的要素は何であるか。素よりその重要なものとしては一定時に於ける社會の現存技術と社會の經濟的要求とを先づ擧げることが出来る。しかし一般的には技術的變化の生起を制約する社會的要素は多様であり、またその個々の要素の作用も種々である。

更らに(B)の作用に就いては、著者は先づこれを二様に考察することの必要を認める。即ち(1)一定時に於ける社會の現存技術がその社會の諸状態を制約する作用であり、それは正に繼續的な作用であり、また技術と社會の諸状態との關係は因果關係——即ち繼起の必然的關係——としてではなく、同時存在の必然的關係——著者はこれを函数的關係と呼んでゐる——として理解されねばならぬ。これに對して、(2)新しき技術的變化が、社會の諸状態に影響を及ぼす作用がある。そしてこの場合新しき技術的變化は特定技術の變化として現はれ、この特定の技術的變化が一時的のものである限り、その作用は非繼續的である。社會の諸状態に對する技術の右の如き繼續的並に非繼續的作用は、また種々なる問題を吾々の眼前に展開する。例へば「機械と労働者」の問題として考へられてゐるものがその一つであり——この問題それ自体は更らに多方面の内容を持つてゐる——更らに從來一般には尙ほ不充分にか考へられてゐないが、社會組織の問題がまた技術との關係に於いて考察されなければならない。

右の(B)の作用の二の方面の外に、尙ほ著者は比較的長期に互る諸技術的變化の綜合的、繼續的作用を考へること

との重要を認めてゐる。蓋し特定の技術的手段の變化に續いて、斷えず他種の技術的手段の變化が行はれ、従つてこれ等總ての技術的變化を稍々長期間に互つて綜合的に觀れば、その作用は或る程度まで繼續的であると見做され得るからである。

これ等の技術的變化が社會の諸状態に何等かの變化を齎し、後者がまた前者に影響する限り、これ等を相互に相關聯せしめ、これを綜合的に研究することが「技術と社會」の研究の問題となる。但し著者の見解に就いて此處に一言注意すべき點は、技術的變化は社會的變化の特に樞要なる原因ではあるが、それは社會的變化の唯一の原因ではないと云ふ見解である。

「技術と社會」の問題、乃至は技術の社會的關聯の問題に關する凡そ右の如き基本的見解に基づいて、此處に包括的な技術の社會學的研究を行ふとすることが正に著者の企圖する所であり、しかもその廣潤なる研究の意圖に従へば、先づ總括的な技術發達史が取り擧げられ、更らに技術の社會的關聯の理論的研究が次いで行はれる豫定であり、この理論的研究の後にはその政策論的研究の希望も亦表明せられてゐる。そして著者のこれ等の研究は臆て引き續いて刊行せられる數卷の著作に依つて滿される筈であり、今吾々の手にし得た『技術と社會』(第一卷)は右の研究計畫に對する序説として書かれたものである。従つて技術の社會的關聯の諸問題に關する著者の詳細な研究は、今後公にせられるその歴史的並に理論的研究に俟たなければならぬ。しかも其處には歴史的にも亦理論的にも、更らに政策論の立場から觀ても種々の重要な問題が含まれてゐる。例へば從來機械と労働者の問題として知られてゐるもの、就中最近では補償説か労働者解放説かの問題、技術的變化の社會的變化に對する影響の問題に關聯する唯物史觀の検討、更らに社會組織の變化に對する技術的發展の關聯等、總てこれ等は著者が今後巨細に渡つて究明しや

うとする問題の内に加へられてゐる。

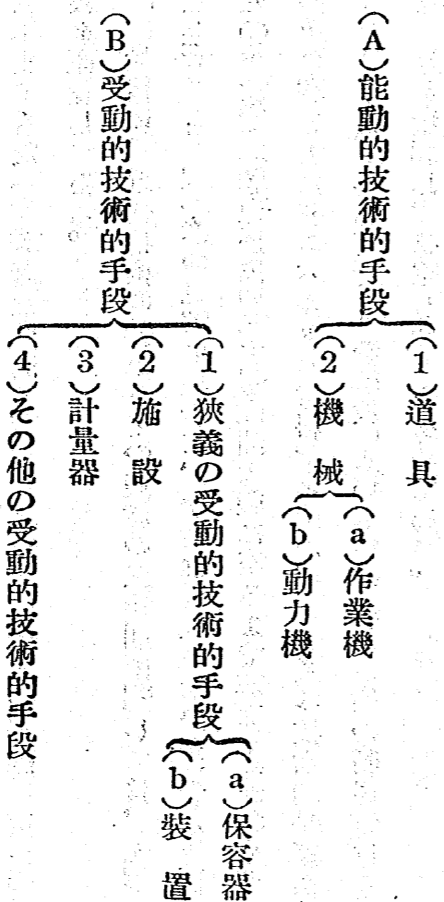
私は讀者と共に先づ此處で、馬場教授の右の如き包括的な、精細にして廣汎な技術研究の學問的企圖とその多大な努力に對して最大の敬意を拂ひ、且つ同時にその研究業跡の今後引き續いて一日も早く世に出でんことを期待して止まないものである。吾國に於ける技術の社會科學的研究は僅かにこの數年來一部識者の興味を喚起しつゝある状態であるが、歐米諸國に於ける同研究は既に甚だ多量である。しかもこれ等の諸研究は馬場教授の「技術と社會」の問題に關する右の如き包括的企圖に比較すれば、その多くは尙ほ個別的特殊研究であつて、教授がこれ等の諸研究を適當に斟酌し、その批判的、系統的研究に完成せられんとすることは、特に吾國の學界のために何人にも多大の期待を感じしめる所以である。

「技術と社會」の問題に對する序説として先づ公刊せられた「技術と社會」(第二卷)は、技術の概念、技術的手段の諸種類、動力と其の推移、近代技術の特色と其の發達の三時期の四章に分たれ、菊版約四百五十頁(本文)に渡る詳細な研究であつて、その序説としての役割を充分果してゐる。今その内容に就いて特徴的な點を簡単に指摘すれば次ぎの如くである。

先づ技術の概念に關して、著者は一定の目的に到達するための方法としての廣義の技術概念から出發して、物的補助手段を使用する技術としての器具的技術と技術的手段の概念を明かにし、更らに技術即ち技術的手段なりと見做す技術概念の發展を鮮明してゐるが、これ等の序述は技術の社會科學的研究を志すものに取つては、是非とも一讀を薦めたい部分である。そしてこれに續いて著者は「社會の技術」なる概念を定立してゐるが、それは一定の時點に於いて、一定の社會に用ひらるゝ諸種の技術的手段を總稱せるものであり、諸種の技術的手段を綜合してそれを

全社會的關聯に於いて考察せんとするために必要とせられるものである。この「社會の技術」なる概念は總て「社會の動力」、「社會の材料」等の概念を生んでゐるが、更らにそれと關聯して著者は所謂機械體系、乃至技術的手段の體系、技術複合體——一定の時點ではなく、一定の時代の間に使用さるゝ技術的手段の體系、例へば近代技術と云ふ場合に考へられてゐるもの——等の概念を明確にしてゐるが、その何れも技術概念に關する論理的考察に於いて多少とも吾々の學び得る點であらう。

第二に、著者は技術的手段の諸種類を明確に知らしめんがために、その分類を試みてゐるが、それは次ぎの如くである。



從來技術の問題と云へば、多くは機械をその對象としてゐるが、著者は機械に對して受動的技術的手段、特にマタレの研究に従つてその内裝置の重要を説くことは、著者がその先きの著作である「技術と經濟」以來の努力に屬し

て居る。

第三に技術的手段の發展と關聯して、特に近代技術の發展の場合には動力利用とその推移が重要な意義を持つことは云ふまでもない。著者は此處で「社會の動力」の發展の概觀を與へつゝ、最近の所謂電力時代の開始とその社會的意義を概説してゐる。

第四に最後に、近代技術の特色とその發達の三時期に關しては、先づ大體マンフォード(L. Mumford; *Technics and Civilization*. 1934)の見解に従つて、著者は近代技術の發達を第一期近代技術始原期(大體西紀一〇〇〇年より一七五〇年)第二期舊技術期(大體歐洲大戰に至るまで)第三期新技術期に分たうとするものである。そして近代技術の特色に關してはゾムバルトの材料、エネルギー、及び技術的手段様式の三方面に關する歴史的研究に基づき、「有機的なるもの」諸制限よりの解放」といふ彼の近代技術の特徴付けを、大體マンフォードの所論を引用しつゝ、著者はこれを批判し、是正しやうと努めてゐる。

馬場教授の新著『技術と社會』(第一卷)は内容的には以上の如き諸特徴を保有しつゝ、氏の向後の詳細な研究に對する序説として書かれたものであり、既にその内に吾々に對して重要な諸問題を暗示してゐることは先きに述べた通りである。且つまた本書は著者の廣汎に渡る文献の涉獵と技術に關する技術學的理解とに依つて、その序述は甚だしく精細であつて、一般に技術學的知識に欠ける社會科學者と特に技術問題に興味を持つ後進學徒に益する所甚大だと云はねばならない。更らに私は此處に單に技術問題に興味を有するもの許りではなく、一般に社會科學者の座右に本書を推舉し度いのである。蓋しその見解の如何を問はず、社會の諸狀態を制約する技術の作用は今日最早や輕視すべからざるものであるからである。

以上私は馬場教授の「技術と社會」の問題に關する學的意圖と、その序説としての『技術と社會』(第一卷)を讀者の前に紹介したのであるが、最後に私は本書に對して多少の希望を申し添へて本紹介文を終り度いと思ふ。

先きにも一言したやうに、馬場教授の先きの著作『技術と經濟』に於いては、著者は技術の本質を究明する技術の哲學的研究を以つて始めてゐるのであるが、「技術と社會」の問題に於いては吾々は技術の社會的意義に就いての從來の技術の社會哲學的諸見解に對する著者の論評と、その批判的、積極的見解に接し得なかつたのは甚だ心残りがある。素より技術の社會的意義に關しては、技術の社會的關聯の歴史の並に理論的考察の後に、これを問題とせられることがあるとすれば、吾々はそれが該問題を取り擧げる適當な順序であることを否定するものではない。しかし乍ら「技術と社會」の問題に關する著者の廣濶な研究計畫の序説として、技術の社會的意義に就いての一般的概説を欠除せることは本書に一抹の淋しさを感じしめてゐるのではなからうか。何れにしてもこの問題に對する著者の批判的見解が後にも補足せられることがあれば、一般の讀者を裨益すること必ずしも尠しとしないであらう。

更らに技術と社會の二様の相互關聯に於いて、技術的變化に關して左の事情を豫め明かにして置くことが、恐らく必要にして且つ重要であらう。著者は單に發明に依る新しき技術的手段の追加を擧指せられるに過ぎないが、新しき技術的手段の追加は二様に考へられる。その一つは新生産物(或は Service)の生産を可能にする技術的手段の發明に依る追加であり、他の一つは既存の技術的手段の改良、即ち既存の技術的手段に對する新技術的手段の添加、及び新技術的手段に依る既存の技術的手段の代置がこれである。そしてこの兩者共にその社會的關聯に於いて重要であるが、技術的變化、技術的進歩の社會的關聯の問題に於いて、歴史的にも亦理論的にも特に兩者の區別が種々なる方面に於いて各々特異の重要問題を提起することは、吾々の看過し得ない所である。「技術と社會」

の問題に關する序論としての著者の新著中に、理論的にも歴史的にも全くこの點を看過して居られるやうに見へ、且つ少くともこの點を明確にして居られないことは、私の最も不満足に感ずる所である。

——昭和十二年二月十六日稿——

ナチス獨逸に關する三文獻

加田 哲 二

- 一 飯澤章治編 ヒットラー政權の表裏
- 二 大塚虎雄著 ナチ獨逸を往く
- 三 電報通信社編 獨逸大觀

日獨防共協定が成立してから、わが國において、ナチス・ドイツの國情に關する研究心は、多少昂揚したやうに思はれる。それには二つの立場がある。第一に日獨防共協定の成立を祝福し、ナチス・ドイツのファッショ的傾向に學ばんとするもので、第二は、このナチス・ドイツのファッショ的傾向に恐れを懷いてゐる者が、ナチスが何を爲したか、果して彼等に學ぶべき何ものかを有するかといふ點を研究せんとする者である。しかし、その何れもが、適當の著述なり報告書なりの缺乏に困窮してゐたことは事實である。而して、ナチス・ドイツとの協定がわが國に大きな影響を與へ得ることは、考へられる。それは、ドイツがイギリスとともに、わが政治方面の明治維新以來の教師的地位にあり、殊に、伊藤博文その他のドイツ政治の學習模倣が、わが官吏團の中に、少からずドイツ崇拜または模倣熱を植えつけ、現在においても、その傾向は退潮してゐない事實に徴しても、明かであらう。